

図像から見る「文学」の可能性

—シンポジウム「図像のなかの日本文学」報告

イタサカ ノリコ
板坂 則子

国際日本文学研究集会は、第37回となった去年の集会からシンポジウムを取り入れ、一つのテーマを巡って国内および海外の研究者からの刺激的な意見と提案を元に、文学に関わるより先鋭的な問題意識を明らかにし、そこから見える未来像を探ろうとしている。今回は中川成美委員長（立命館大学）を中心に、本集会の委員から活発な意見が交わされ、さまざまな分野からのアプローチが期待される図像を取り上げることとなった。図像研究は時に文学の域を飛び出し、人文研究の域からをも脱け出して現代社会の中で視覚が抉り出す新しい感覚を追い求めていく面を持つ。同時に古典に於いては長らく看過されてきた大衆性や多様な読みがもたらす複層的な享受の在り方を甦らせる可能性をはらむものとする。本委員会の外部委員としてこのシンポジウム企画に関わり、資料館の研究集会担当・陳捷氏と共に各パネラーの方々から多くの示唆を受け続けた経過を記して、本シンポジウムの報告としたい。

文学に関わる図像は、現存する最古の『源氏物語』テキストが『源氏物語絵巻』のそれであることを思い出すまでもなく、日本文学の中で連綿たる流れを保ち続けている。『源氏物語』の絵合巻に窺えるような晴れやかな絵物語が平安貴族たちに愛玩され、中世には金箔や鮮やかな岩絵具を用いた華麗な絵物語が富裕層の女性たちを飾り、やがて近世の絵入り板本が身分を問わず多くの人々に愛されてきたわけであるが、文学と関わる図像はテキストと併存しているが故に、テキストの下位にたつものとして捉えられてきた。たとえば読本『椿説弓

張月』(1807～1811)は著者曲亭馬琴にとって最初の長編稗史小説であるが、画師葛飾北斎が挿絵を担当し、この戯作(近世後期小説)と浮世絵の両巨匠が手を組んだ諸作の中でもっとも充実した美事な画像を数多掲げている。しかし著者馬琴は、読本というジャンル名が表すようにどこまでもテキスト主体、すなわち自らの掌中に創り出された作品として捉えている。現存する読本稿本を見ると、馬琴は自らが描いた挿絵下絵の中に、例えば「時こうはる三月夕ぐれ也」「いかりのてい」「とし四十余」「刀はちいさかたな也」^①など、北斎が本文部分から逸脱して描くことを避けるための指示を朱筆で示している。北斎が抜き出した技量を持つ画師であることは認めつつも、彼が「己が画にして作者に随はじと存候」者であり、「小生稿本之通りに少しも違ず画が」かないことを馬琴は嘆いているのである^②。凝った文体を持つ読本に於いては、挿絵はどこまでも本文内容に付随すべきものであった。

とはいえ、よりリテラシーの低い大衆向けの小冊子では、挿絵の重要度は増す。周知のように、草双紙では本文と挿絵はすべての頁において共存し、装訂の変化によって呼称が黄表紙から合巻へと変化するに随って本文部分の文字数が格段に増加するものの、それに合わせて挿絵も複雑に描き込まれていく。馬琴の草双紙(合巻)の代表作である『傾城水滸伝』^③を見るならば、中国白話小説『水滸伝』の主人公である男の豪傑たちの性を女性に反転させた破天荒な物語が世の喝采を浴び、その影響として、「此節、女の気づよきものを、アレはけいせい水滸伝じやなど、申候」^④といわれた女性読者たちは、本文以上に、豊国たちの手になる豪勇な女性たちが獅子奮迅の働きを見せる挿絵に大いに心を揺り動かされたに違いない。『倭紫田舎源氏』^⑤が草双紙最大の売れ行きを誇ったのは、『源氏物語』を知悉し『湖月抄』等を用いて細部まで『源氏物語』の知識を鏤めながらも美事に当世向きに換骨奪胎してみせた作者柳亭種彦の手柄であったことは勿論ではあるが、同時に浮世絵界一の人気を誇る歌川国貞の流麗な挿絵の魅力も大きかったことはいまでもなく、ここから源氏絵と呼ばれる本作を題材とする浮世絵の一形態が生み出されてもいるのである。草双紙に

あっては、作者と絵師は対等にその作の商品価値を担っていたといえよう。

そしてこの江戸期の戯作に端を発する「俗」の文芸、すなわち「サブカルチャー」の範疇に入る娯楽の為の書物は、現代に至ってますますその存在を大きくしている。マンガやアニメ、ゲーム、映画にTV、携帯小説以降の紙媒体を離れて生み出されるポップカルチャーの小説群、同人の祭りの場としてのコミケ…。その中において文学研究の場は、図像をどのように扱ってきたのだろうか。残念ながら、長らく文学研究にあっては、図像解釈は下位に置かれ続けてきた。その理由は、曲亭馬琴がテキスト主体の読本を、画像とテキストが共存する草双紙より遥かに尊重したことに通じている。すなわち、知識を尊重し漢字を多用する読本の読者が、主人公達の運命を楽しみ、平仮名を主体とする草双紙読者よりも高位にあったからに他ならない。今西祐一郎氏の言をお借りするならば、たとえば絵入り平仮名本『往生要集』の跋文に見るように、「平仮名書き（に加え、絵入りであること）について無学者や女性出家者のためであるという説明がなされている」のであり、「テキストにおける子供を媒介とした絵と平仮名との密接な関係が明快に示されている」のである^⑥。先述の草双紙で見るとすれば、絵入り、平仮名主体の小冊子であるそれは、「わづかに児女のみのつれづれを慰る而已」（山東京伝）^⑦、「元来はかなき草双子もとより」（柳亭種彦）^⑧、と作者自らが序文や文末に述べる作品群であり、作中で提唱される読者対象は「婦幼」^⑨「幼童兒女をさなこども」^⑩と、女性や特に幼い子供たちを正面にたてて、リテラシーの低い大衆層向けのものと作者自らが主張していたのである。たとえ草双紙などの画組が読者の嗜好に大きく関わり、その売れ行きを左右しても、そのことは草双紙そのものの価値を過小に評価する要因となっていた。漢字テキスト＞平仮名テキスト＞図像という強靱なヒエラルキーが古典にはついて回り、図像はテキストの理解を補うための補完的な存在にすぎないという固定観念が現在に至ってもなお、「メイン」と「サブ」の呼称と共に在り続けているのである。

しかし、図像は読者のリテラシーの不足を補い、常にテキストの内容を視覚的に表す存在に留まるわけでは決してない。江戸期以降の出版メディアの擡

頭期以来、その傾向は殊に顕著に見られる。たとえばJoshua Mostow氏の指摘によれば、菱川師宣による百人一首の絵入り本『百人一首像讚抄』において、冒頭の天智天皇の和歌「秋の田のかりほのいほのとまをあらみ我が衣手は露にぬれつつ」の「かりほのいほ」を、テキスト部分では「仮庵の庵なり」として「刈った稲の穂の番人の庵」とする説を退けて提示しているにもかかわらず、師宣が描く本歌の図像には鎌で稲を刈り取る農民の姿が描かれており、この矛盾する二重性が「視覚的効果」を呼ぶとされる¹¹。このように、注釈部分で排斥された異端の解釈を画師は画像に於いて描き示し、結果としてその時代の重層的な享受の在り方を見せているというのである。また、春画の多くでは、男女の交わる場面の周囲にその場の情景にそぐわない図像が描き込まれる例が多い。たとえば家の中では舅姑に気がねして思うように抱き合えない若夫婦が雪中の夜道で交情する図で、文中や設定には笑いの要素はないにも関わらず、背景の雪塊は男性器の形に聳え上がり画面に滑稽味を添えている¹²。春本は「笑本^{えほん}」であり、笑いの要素がシリアスな状況の中にも描き込まれ、春画春本が性を寿ぐものである姿勢を常に見せているのである。このように図像はテキストに沿うのみではなく、時に叛逆し、重層し、テキストのみでは訪れることの出来ない世界を出現させるものでもある。図像を中心軸に据えた日本文学研究が望まれる由縁である。

今回のシンポジウム「図像のなかの日本文学」パネラーの御三方は、図像を中心に据えた研究をなされてこられた。日本文学研究を、テキスト面からのみではなく、図像からの斬新な視点を用いて提示いただけること必定である。まずは御三方のこれまでの図像研究の歩みをご紹介します。なお、最初の□内は本集会の「要旨 (Abstracts)」に載った紹介文である。

楊 曉捷先生

楊 曉捷 (ヤン・ショオジェ)

学部は中国北京大学(1982年卒業)、大学院は京都大学。京都大学国文学博士(1989年)。研究分野は日本の中世文学、とりわけ絵巻物。主な出版物は、絵巻研究に関連して、『鬼のいる光景』(角川書店、2002年)、「後三年の合戦を絵に聞く」(『文学』、2009年9月)、「絵巻の文法序説」(『日本研究』、2012年9月)など、デジタル技術と人文学の研究に関連して、『デジタル人文学のすすめ』(共著、勉誠出版、2013年)がある。

楊 曉捷氏の図像を巡る研究は、インターネットの普及によってこれまで各地の美術館や図書館、大学等の研究機関に秘蔵されてきた絵巻類をはじめとする画像を含む古典作品が公開され、広く共有されるようになったここ二十年ほどの動きとほぼ並行して行われている。提供されるデジタル化された資料の多くは無償での利用が可能であり、その精密性と利便性はこれまでの紙媒体の資料を遥かに凌駕しているが、楊氏はその初期から啓蒙的な紹介を積極的に行なってこられた。楊氏の編集された『デジタル人文学のすすめ』^⑬ではデジタル人文学の現状と発展が様々な立ち位置から報告されているが、その中で氏が提唱する「デジタル人文学」は、今後の日本文学文化研究に大きな変革をもたらすと思われる。私自身、楊氏が研究ノートとして纏められた「日本古典画像資料を含む主なデジタルリソース」に助けられることが多々あり、「ウィキ絵巻」^⑭として公開されたウィキのタグ機能を用いて画と詞書、対応する画を持つ語彙が現れる『春日権現験記絵』『後三年合戦絵詞』等の四つの中世絵巻は、重層的な読みが思惟の中を飛び出して眼前に並べられることでめくるめくような新鮮な感覚をもたらす。そしてこれら画像や文字、時に音声や動画も含めてのマルチメディアを活用した古典文学研究の大きな成果が、『鬼のいる光景—『長谷雄草紙』に見る中世—』^⑮として纏められている。本書は14世紀初頭に制作されたとされる絵巻『長谷雄草紙』を、描かれたそれぞれの画面を丹念に読み解くことで、画という表現様式でしか表わし得ない中世の人々の豊かな感性を、美事にすくい取った楽しくスリリングな研究書である。図像を手がかりに失われた中世の事物や風俗、行動、嗜好などあらゆる方向に伸びる探索によって、

この絵巻に籠められた昔時の人々の論理やメッセージが眼前に見る如く浮かび上がってくるのである。

実は、氏は、私の勤務校である専修大学の日本文学文化学科の学生を対象に、「国際間のネットワーク利用共同授業」としてインターネットを用いたカナダからの遠隔授業を担当くださってもいる。そこで氏はこの『長谷雄草紙』の山場に音声を加えて短いアニメーションに仕立てたり、『後三年合戦絵詞』から場面を切り抜いて「景正武勇伝」としてマンガに仕立てて学生たちを驚かせ、また時には絵巻から「首切り」の場や「出産」の場を取り上げ、中世という時代をテキスト面からとは全く異なる視点から解説されもする。このようにインターネットを最も魅力ある文具として自在に操る楊氏は、図像と文字という二つの媒体の結びつきを自在に監察するシステムを提唱しておられる。絵巻研究に於いて未来に開かれた大きな可能性を感じずにはおられない。

Andrew Gerstle 先生

GERSTLE Andrew (ガーストル・アンドリュー)

ロンドン大学SOASの教授。BA コロンビア大学、MA早稲田大学、PHDハーバード大学。近世文学・芸能の研究。(共著)Shunga: Sex and Pleasure in Japanese Art (British Museum Press, 2013)、『江戸をんなの春画本—艶と笑の夫婦指南』(平凡社、2011年)、(共著)『艶道日夜女宝記』(近世艶本資料集成IV月岡雪鼎・2、国際日本文化研究センター、2010年)、『流光斎図録—上方役者似顔絵の黎明』(joint ed. with Akiko Yano) (Mukogawa Women's University, 2009)、『大坂歌舞伎展—上方役者絵と都市文化』(Osaka Museum of History, 2005)、Chikamatsu: Five Late Plays, (Columbia University Press, 2001)、Eighteenth Century Japan: Culture and Society (editor, Allen and Unwin Australia, 1989)。

Gerstle氏は、近松の浄瑠璃から、やがて役者絵という図像に関わられるようにもなられた。多くの浮世絵研究が江戸の絵師を中心に扱い、従って役者絵研究も江戸の役者、それも化政・天保期など後期のものを取り上げる中で、Gerstle氏の研究は上方の役者絵に視点を据えておられる。そして2005年、大英博物館、大阪歴史博物館、早稲田演劇博物館に於いて、大規模な「大坂歌舞伎展」

⑯を企画された。上方の浮世絵と江戸の浮世絵は、図像の放つ風情が全く異なることは不思議である。それぞれの絵師の違いを越えて、何とも言えぬ上方色が当たりに立ちこめるのであるが、Gerstle氏は『流光斎図録—上方役者似顔絵の黎明』^⑰において上方役者絵を確立させた絵師・流光斎如圭の仕事を集大成される。この研究報告書には流光斎の全作品が載り、役者の描写法から上方の浮世絵の特質があぶり出されている。そしてこの役者絵の研究と並行して行われたのが春本・春画研究であるところに、氏の自在な視点の在り方が窺われるのではないだろうか。

Gerstle氏は二〇〇九年から一年間、京都の立命館大学に滞在され、国際日本文化研究センターでも研究された。この二機関は本邦に於ける春画・春本研究の要としての機能を果たしており、氏はそこで女性用教訓書のパロディ版春本を通して、今までの男性主体の春本研究に異を唱えられ、江戸期の女性達の大らかな笑いに包まれた性の世界を始めて世に知らしめられた。『江戸をんなの春画本 艶と笑の夫婦指南』^⑱は、月岡雪鼎によって著された『女大楽宝開』『艶道日夜』『女令川趣文』『婚礼秘事袋』という四つの春本を中心に据えた、Gerstle氏による女性と性の関わりの絵解き本である。儒学を振りかざし女性たちの人間味を抹殺する内容の女訓書を、パロディという手法を用いて、夫婦円満の基を性に置き互いの歓びを何よりも重要視する女性たちの為のエロティックな世界に置き換える構造を、氏は丁寧に解説されている。この書の刊行以後、女子学生の間でもこれらの春本をフェミニズムの視点から読み解き卒業論文に結びつける者が出現してきている。そしてGerstle氏のこれらの活動の延長に、2013年に行われた大英博物館での春画展^⑲の監修作業があることはいまでもない。これまで秘められたものとして公の場で展示されることのなかった春画の代表作が165点集められ、春画を文化的・社会的な枠組みの中に置き、正当な評価を目指したものである。メディアの取り上げ方は当初の興味本位の紹介から時を追って学術的な評価に移り、春画を日本美術の中の貴重な一角を占めるものとして見直す契機となった。Gerstle氏の姿勢は、図像から読み解か

れる江戸期の文学文化の真の姿に注がれ続けているといえよう。

土佐 尚子先生

土佐 尚子 (トサ・ナオコ)

メディアアーティスト、研究者、京都大学学術情報メディアセンター教授、工学博士（東京大学）。感情、記憶、意識の情報を扱ったコミュニケーションの可視化表現を研究する。フィルム、ビデオアート、CGを経てメディアアートからカルチュラルコンピューティングの領域を開拓、システム構築を行なう。SIGGRAPH（シーグラフ）ARS ELECTRONICA（アルスエレクトロニカ）といった代表的な文化とテクノロジーの国際会議にて、講演や作品を発表。NY近代美術館、メトロポリタン美術館等の企画展に招待展示。作品はアメリカンフィルムアソシエーション、国立国際美術館、富山県立近代美術館、名古屋県立美術館、高松市立美術館などで収蔵されている。芸術科学会設立メンバー、現在副会長。ATR知能通信研究所主任研究員、科学技術振興機構「相互作用と賢さ」領域研究に従事。マサチューセッツ工科大学建築学部Center for Advanced Visual Studiesフェローアーティストを経て現職。HPは、<http://www.tosa.media.kyoto-u.ac.jp/>

土佐尚子氏は、工学系科学知識にとって最も不得手と思われる人間の情感や体感、心の奥に抱く潜在意識などを扱い、これらの可視化に果敢に挑戦を挑み続けておられる。私がある一端に触れさせていただいたのは、それらをコンピューターを用いてインタラクティブ映像として体験するカルチュラルコンピューティングの領域に於ける成果からである。土佐氏の著書『カルチュラルコンピューティング文化・無意識・ソフトウェアの想像力』²⁰から二例、紹介する。

《ニューロベイビー》感情対話システムとして、コンピューターの中に現れる赤ちゃんキャラクター（ニューロベイビー）を用いたもので、人がニューロベイビーに呼び掛けると、その声の強弱やリズムなどから音声特徴を抽出し、感情認識を行い、それに対応する反応生成の流れによってニューロベイビーが画面上で感情表現を表す。この手法が一つ一つの言葉の意味内容への対応ではないことから、これらによって不特定話者、異文化間のコミュニケーションの

可能性が期待されるが、具体的な意味内容と無関係に人型のアイコンが愛らしくコンピューターの画面上に現れる発想の自在さに瞠目させられた。また、このシステムを併用することでコンピューターによる翻訳機能が、現在のほとんど実用性を持たないレベルから格段に進歩する可能性をも、私は期待する。

《山水禪》統合的な文化を体験しようとするもので、土佐氏は雪舟の山水画に魅了され、そこから禪の世界観を体験できるシステムを構築されたそうである。その進行を辿ると、ユーザーはまず岩や山、月などの任意のアイコンを取り込んで三次元の山水画をコンピューター画面に構成し、その画面の中で禪の修業に旅立つ。画面上のアイコンに触れると俳句が作られ、画面の物質、たとえば花に触れると「拈華微笑」といった禪問答が始まる。画面上の世界との触れあいから生まれるアレゴリーとシンボルから俳句や禪問答が惹起され、日本文学なり文化なりの精神性が自らの体験として画像化されていくという摩訶不思議な世界なのである。

土佐氏の作品はメトロポリタン美術館や国立国際美術館など多くの美術館に展示、収蔵されているが、近年の展示から紹介すると、韓国で行われた「四神旗」作品^②は、250m×30mの巨大LEDスクリーンの上に神話時代からの人類の歴史を思わせる海洋がCGイメージとして現れ、そこに青龍・白虎・朱雀・玄武の四霊獣が出現する壮大なものである。対してシンガポールの「Space Flower」展^②の目録を見ると、例えば「Sound of IKEBANA」と題されたシリーズは複雑怪奇かつ繊細な美そのものの飛沫の映像であるが、これらの原型はわずか数cmの大きさであると言われる。大なるものと小なるものの差異の猛烈さと美しさに心を奪われる。土佐氏の今後から目が放せない由縁である。

以上がパネラーのご紹介である。本集会の昨年度のシンポジウムでは、より深い論議を目指し発表の方向性が定められた。それに倣い、当初は「図像のなかの日本文学」というあまりにも広範な対象を絞り込みたいと志したが、パネラーの御三方は、私の思い描く文学と図像という想定を軽々と越え、新しい光景を開示された。たとえば土佐氏の「ニューロベイビー」では、呼び掛ける人

間の表現内容ではなく、その音声特徴から感情認識を捉えている。意味内容以外のデータで双方向の伝達が可能となる発想からは、文学の根幹に関わる問題が突きつけられている。ここではすぐれて個人的な営みとされる文字テキストの創作が、膨大なデータの中からの機械的選択に委ねられている。図像を読み解く作業の想像を超えた力に圧倒されるのみである。そこで、今回はテーマを絞らず、図像を用いた発想の豊かさをまったく異なる三つの領域から、時間の許す限りご発表いただくこととした。

シンポジウムでは各パネラーの熱の入ったご発表に続き、会場との意見交換がなされたが、楊先生の絵巻の描写と型、ガーストル先生の春画・春本に於けるパロディにみる社会批判、さらには土佐先生のアートと研究の差異など、幅広く、かつそれぞれの本質に関わっていく意見が交わされた。残念ながら充分な時間が取れず、討議の滑り出し部分でシンポジウムの幕を引かざるを得なかったが、土佐先生が披露された液体窒素に触れて空間に飛び散っていく花々の映像から、「創造」のみならず「破壊」の持つ力と美が広く再認識されたように思う。シンポジウムは「創造」の場であるのみならず、時に「破壊」の力を受けることも必要なのかも知れない。今日、私たちはマンガやアニメーションなどの現代日本文化の特徴とされる図像のみならず、多くの人々がカメラ機能の付いた携帯電話を持ち歩いて日常の些細な出来事を保存しており、FaceBookやTwitterなどのSNSにはそれらの図像が満ちあふれている。Lineやメッセージソフトには文字テキストをはね除けてさまざまなスタンプが送り主の感情を伝えている。PCはTV以上に日常的な機器となり、YouTubeに好みの映像を捜すことはさまざまな人が行っている作業であろう。わたしたちの生活はなんと数多の画像に囲まれていることだろう。文字テキスト以上に、画像と音声とが体を包み込む生活が日常的に存在している。そのような社会にあって、今回の刺激に満ちたパネラーの発表が、大きな起爆剤として働き出すことを期待したい。

なお、今回のシンポジウムに向けての話し合いは、個別の面談の他に、ネッ

ト会議ソフト（LiveOn）、グーグル ハングアウト、スカイプ グループなどを用いて意見を交わし合った。ウィンドウズユーザーとアップルユーザーが混在したことから、陳捷氏を含めて5名が揃ってのネット上での動画と音声双方を用いた話し合いにはやや無理があったが、しかし十年ほど前までのWebCamがまだ珍しかった時代から比べれば、今日の情報機器を用いた交流の利便性は隔世の感がある。その中で、国際集会を掲げる本会でも、これらの手法をより取り込む工夫が必要ではないかと、私は思う。来日しての参加は無理でも、ネット会議ソフトやネット会議システムを用いての参加は可能な方も多いのではないだろうか。より「破壊」的な刺激を与えるシンポジウムに向けての一層の果敢な試みを望むところである。本報告の最後に、今回のシンポジウムに参加いただいた皆様に心からの感謝を捧げたい。

【注】

- ①『夢占南柯後記』（曲亭馬琴作、葛飾北斎画、文化9年（1812）刊）稿本
- ②天保11年（1840）8月21日 殿村篠斎宛馬琴書簡
- ③『傾城水滸伝』（曲亭馬琴作、歌川豊国、国安、貞秀画、文政8年（1825）～天保6年（1835）刊、合巻）
- ④文政10年（1827）11月23日 殿村篠斎宛馬琴書翰
- ⑤『修紫田舎源氏』（柳亭種彦作、歌川国貞画、文政12年（1829）～天保13年（1842）刊、合巻）
- ⑥今西祐一郎「「絵入り本」と文字」（『アメリカに渡った物語絵』人間文化研究機構 国文学研究資料館編、ベリかん社、2013年3月刊）
- ⑦『妬湯仇討話』（山東京伝作、歌川豊国画、文化5年（1808）刊、合巻）
- ⑧『修紫田舎源氏』27編序
- ⑨『盤州将棋合戦』（曲亭馬琴作、勝川春扇画、文化14年（1817）刊、合巻）
- ⑩『児雷也豪傑譚』十一編序（美因垣笑顔作、歌川国貞（三代豊国）画、嘉永2年（1849）刊、合巻）
- ⑪Joshua Mostow「百人一首の絵画化 享受と解釈」（『国際日本文学研究集會会議録24』、2001年3月刊）
- ⑫坂板則子「性表現の輪郭 - 艶本と人情本 -」（『日本の美学21号』ベリかん社、1994年7月刊）、本図は恋川笑山作・画『霞の引染』中の一図を述べたが、同様の図像は多い。
- ⑬『デジタル人文学のすすめ』（楊曉捷、小松和彦、荒木浩編、勉誠出版、2013年7月刊）
- ⑭<https://sites.google.com/site/wikiemaki/>
- ⑮楊 曉捷『鬼のいる光景—『長谷雄草紙』に見る中世—』（角川書店、2002年2月刊）
- ⑯『大坂歌舞伎展—上方役者絵と都市文化』（アンドリユー・ガーストル、ティム・クラーク、矢野明子編、大坂歴史博物館、2005年刊）
- ⑰『流光斎図録—上方役者似顔絵の黎明』（アンドリユー・ガーストル、矢野明子編、武庫川女子大学関西文化研究センター、2009年3月刊）
- ⑱『江戸をんなの春画本 艶と笑の夫婦指南』（平凡社新書、2011年3月刊）

- ⑲ 2013年10月3日～2014年1月5日開催。
- ⑳ 『カルチュラルコンピューティング文化・無意識・ソフトウェアの想像力』（NTT出版、2009年9月刊）
- ㉑ 韓国、麗水海洋万博におけるコミッション作品（2012年5月12日～8月12日）
- ㉒ シンガポール、Ikkan Art Gallery（2013年9月5日～11月1日）